



道総研

## 道南太平洋海域スケトウダラニュース

令和7年度 第3号 2026年1月6日

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構

函館水産試験場 調査研究部

### 令和7年度道南太平洋スケトウダラ産卵来遊群分布調査（3次調査）結果

函館水試試験調査船「金星丸」により行われたスケトウダラ資源調査の結果をお知らせします。

- ・ 調査期間：2025年12月23～24日
- ・ 調査海域：道南太平洋の水深50～600mの海域（図1右上）

今年度の3次調査は、金星丸の船体検査の都合で、年明け前の12月下旬に実施しましたが、調査日程や天候の都合で全域での調査ができませんでした。

- ・ 魚群反応の強い海域は登別沖。
- ・ 魚群反応は水深250mからみられたが、450m付近が最も強かった。
- ・ 水温は、11月中旬に行った2次調査時と比べ、水深100～450mにかけては1.0～2.5℃高くなっていた。

1. 今年度はE～I線までしか魚探調査は出来ませんでしたが（図1）、スケトウダラとみられる魚群は調査範囲全域でみられました。とくに胆振沖の184漁区（登別沖）には比較的強い反応がみられました（図1・2）。
2. 渡島沖から胆振沖にかけての平均反応量ですが、今年度は12月に調査が前倒しされたため、過去の同時期との比較ができないことから、11月に実施した2次調査の平均反応量と比較すると、2次調査よりも高い平均反応量となっていました（図3）。
3. スケトウダラの魚群反応は、水深250m付近からみられましたが、まとまった魚群反応は水深450m付近にみられました（図4）。2次調査の同じ海域（E～I線にかけて）の反応と比較すると、魚群の分布深度は100m程度浅くなっていました（図4）。
4. 今回の調査ではトロールによる漁獲調査が実施できなかったため、漁獲物の組成については、12月中旬に行った沖底（かけ回し）漁獲物調査の結果をお知らせします（栽培水産試験場実施）。これによると、沖底漁獲物の体長（尾叉長）は、45cm前後が主体となっていました、40cm前後にも山がみられる多峰型となっていました（図5）。
5. 調査海域の水温（H線沖）は、日射や気温の影響を受ける表層域は1次調査（8月）及び2次調査（11月）を下回っていましたが、水深100m以深では、1次及び2次調査を上回っていました。とくに、水深100～450mにかけては2次調査よりも1.0～2.5℃高くなっており、スケトウダラ成魚の生息に好適とされる5℃以下の水温は、水深450m以深となっていました（図6）。

なお、今年度のスケトウダラニュースは本号で終了となります。

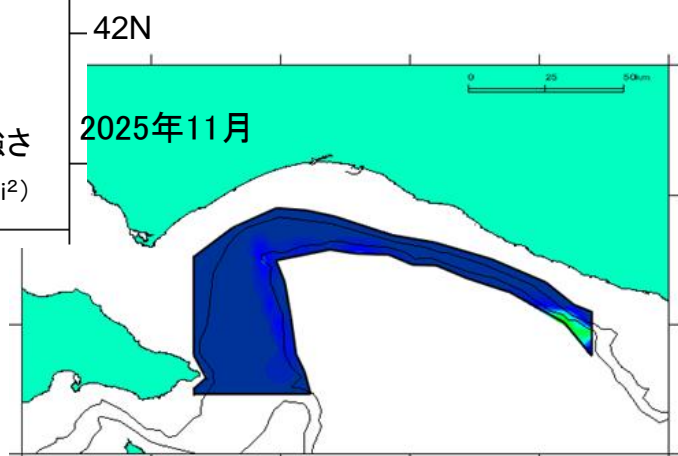
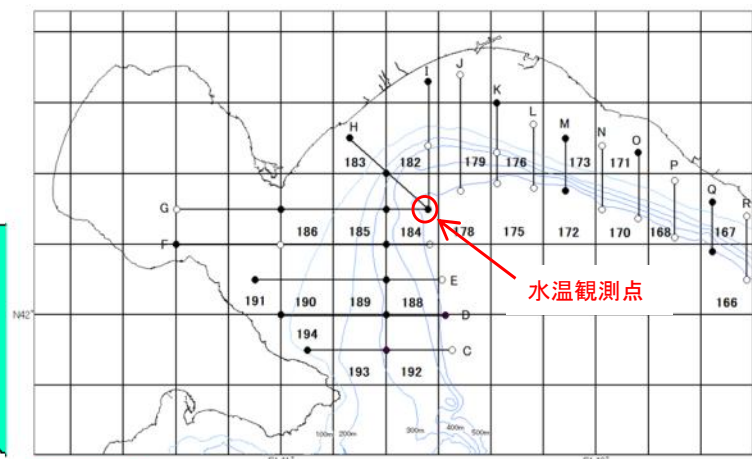
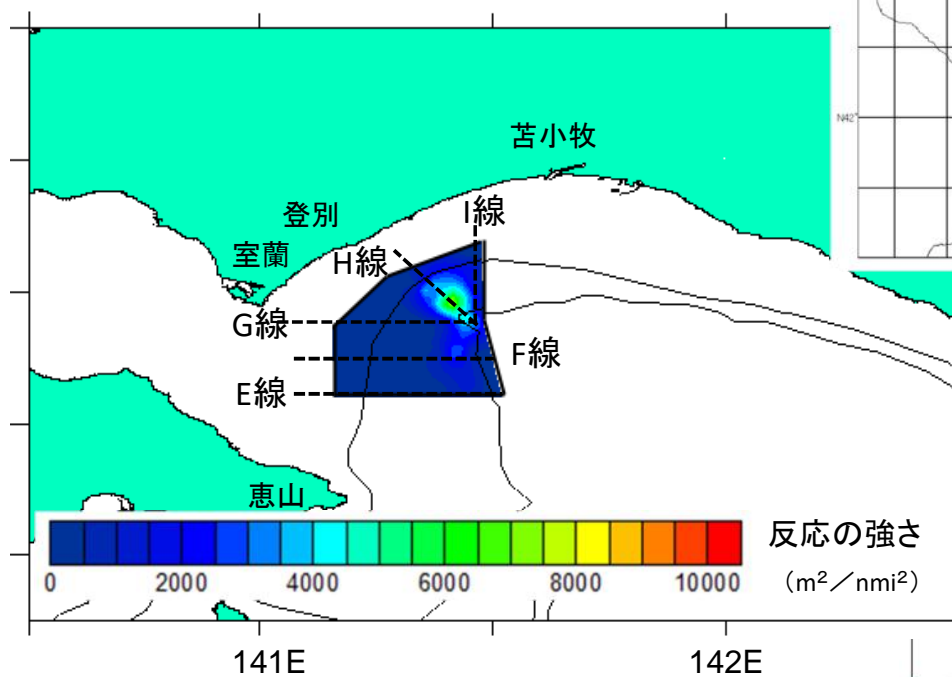


図1 調査海域における魚群の分布(2025年12月)  
(右上図は調査海域図、右下図は2025年11月の分布図)

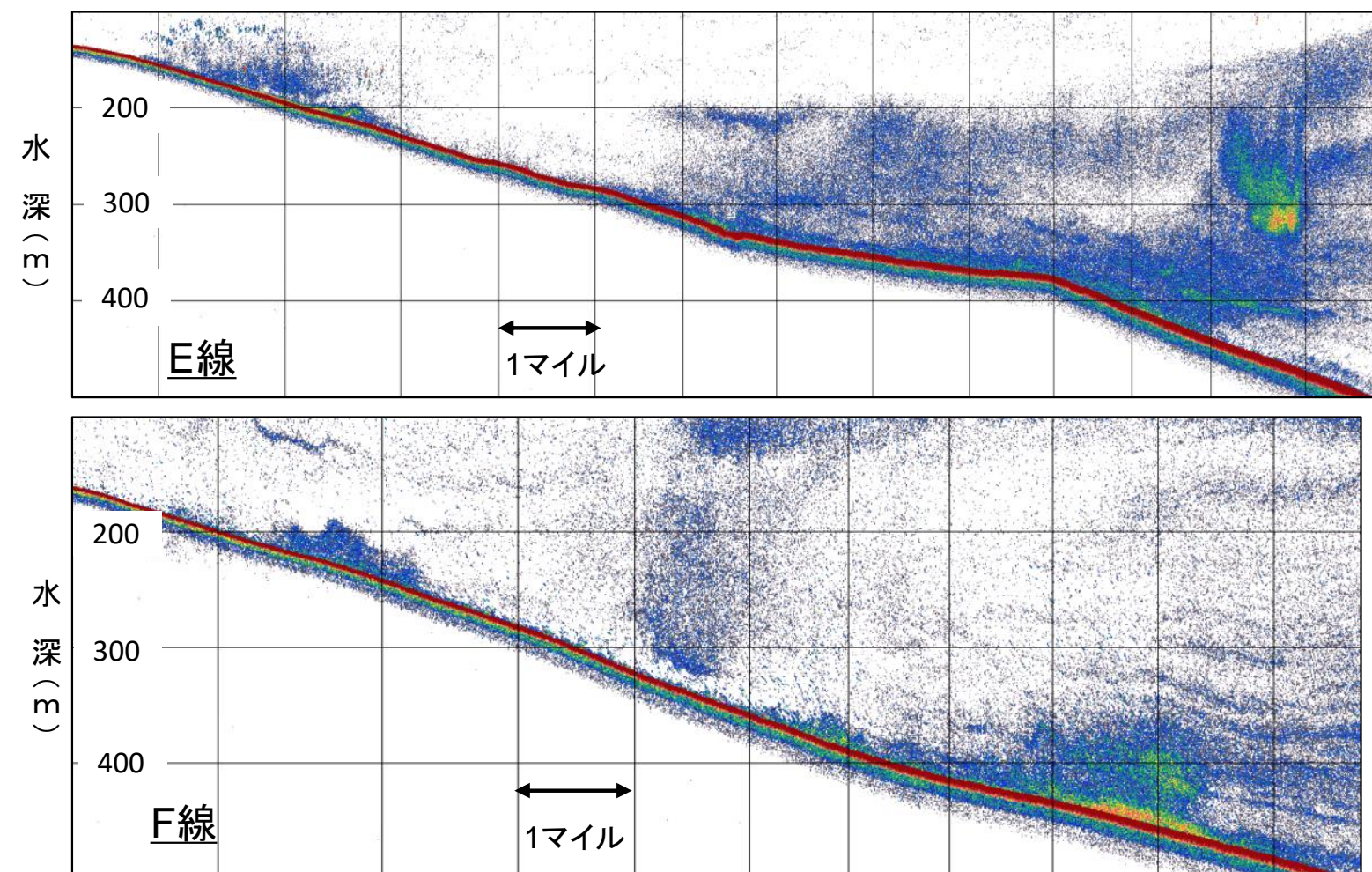


図2-1 魚群の分布状況(計量魚探画像)



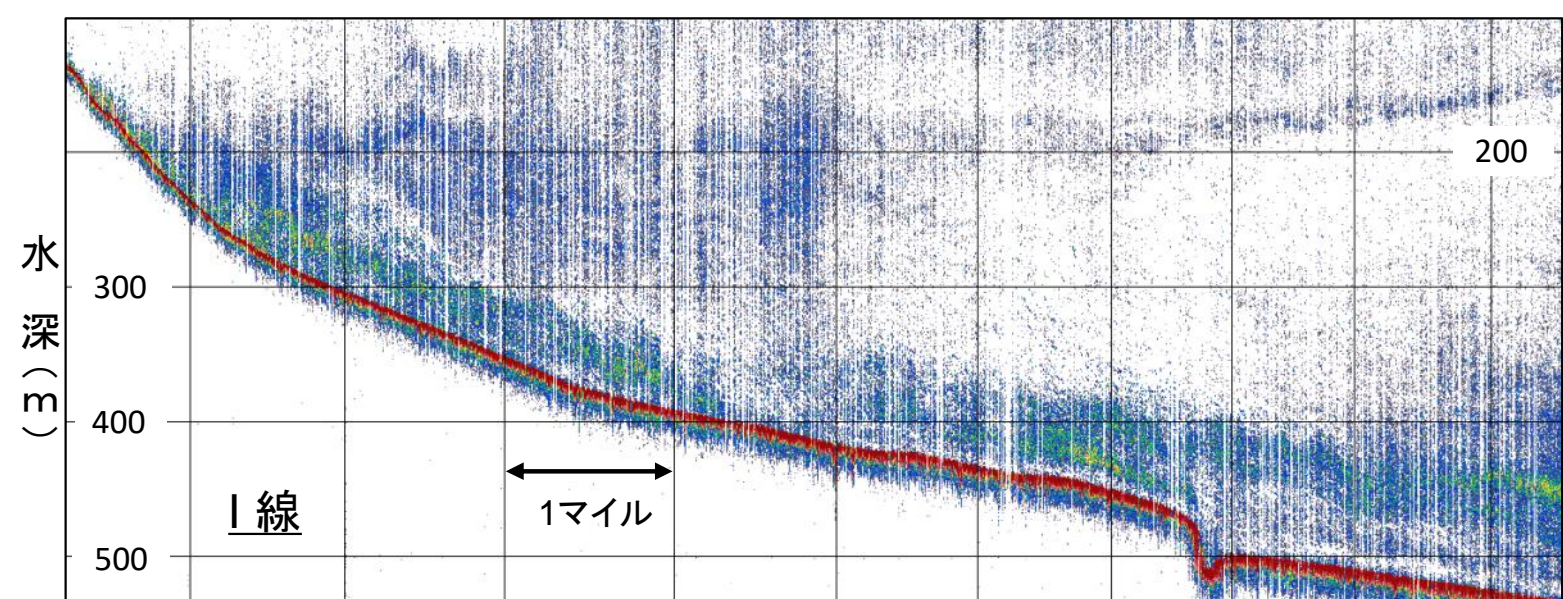
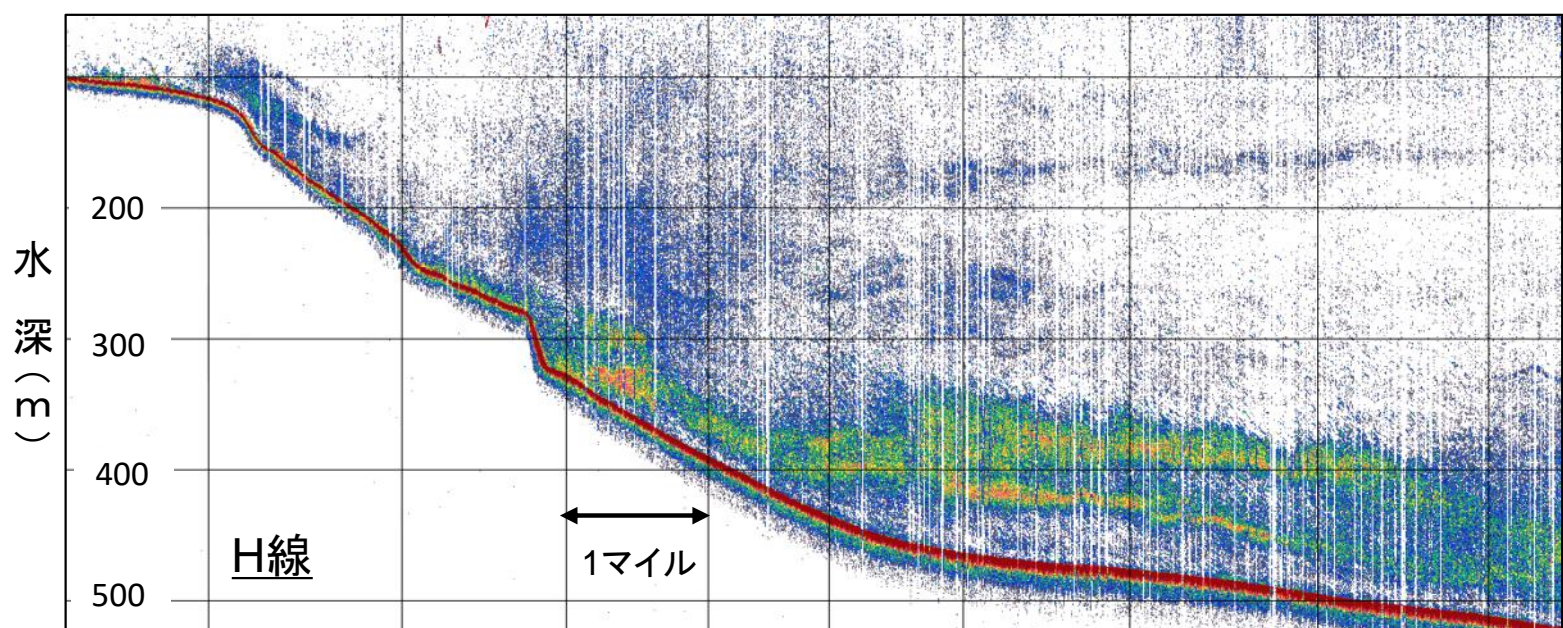
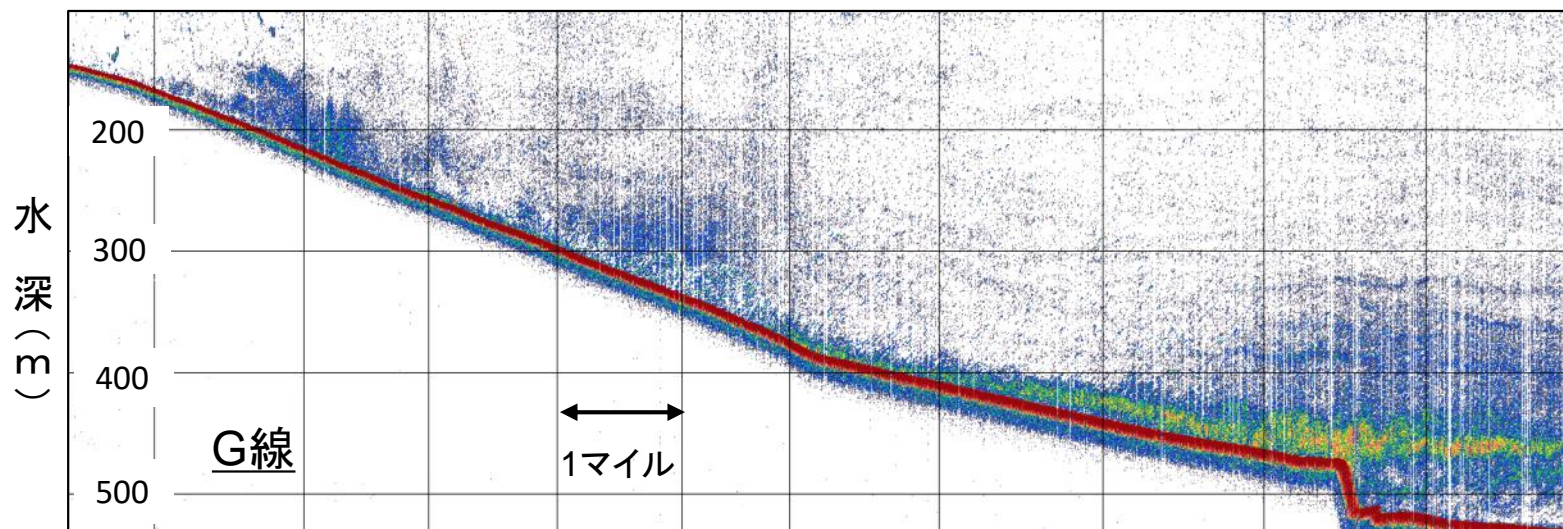


図2-2 魚群の分布状況(計量魚探画像)つづき



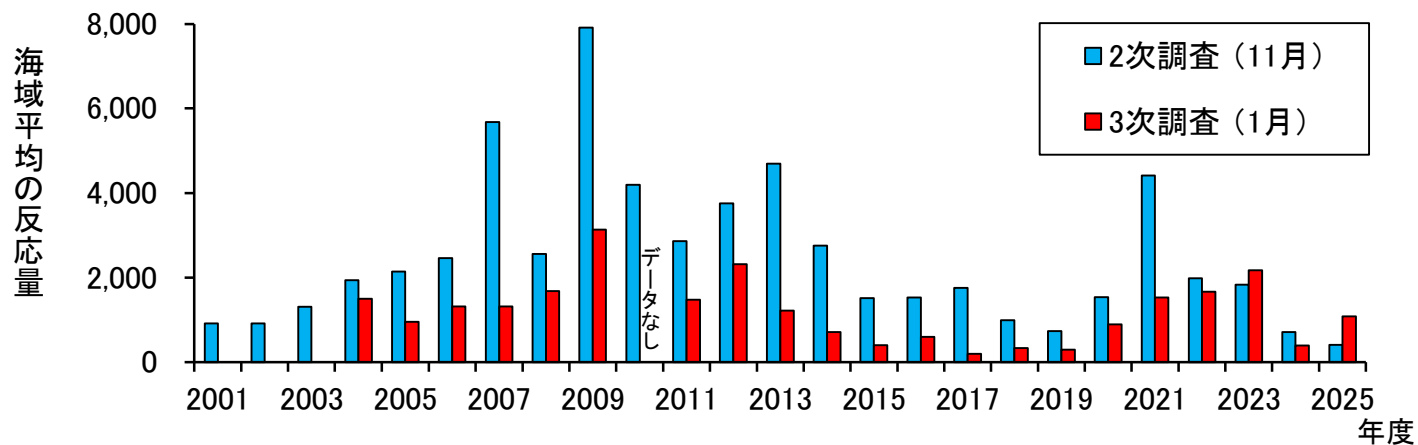


図3 2次調査(11月)及び3次調査(1月)におけるスケウダラ魚探反応量の推移  
(1平方マイルあたりの反応量) ただし、2025年度の3次調査は12月

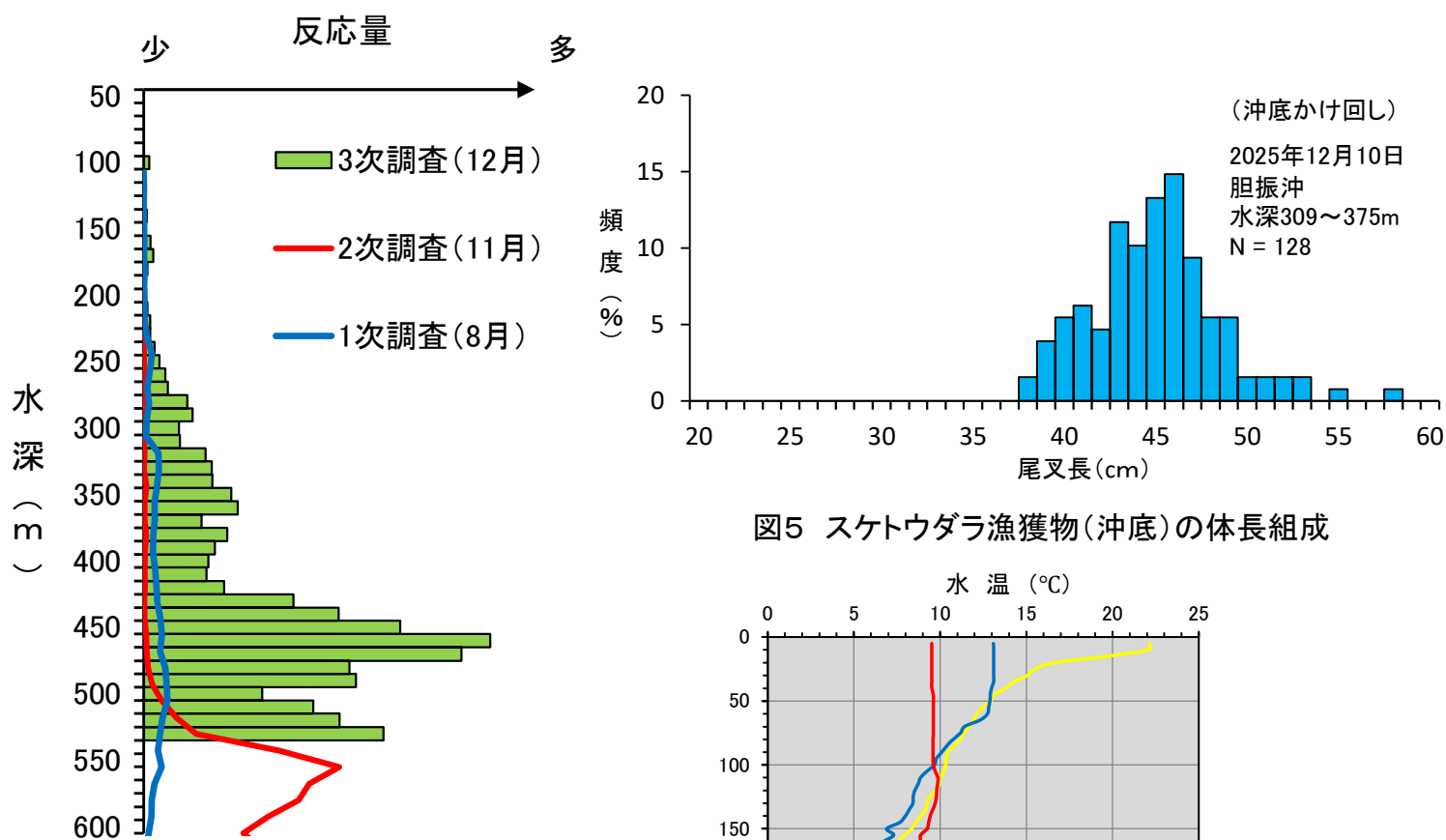


図4 水深別の魚探反応量  
(E~I 線)

図5 スケウダラ漁獲物(沖底)の体長組成

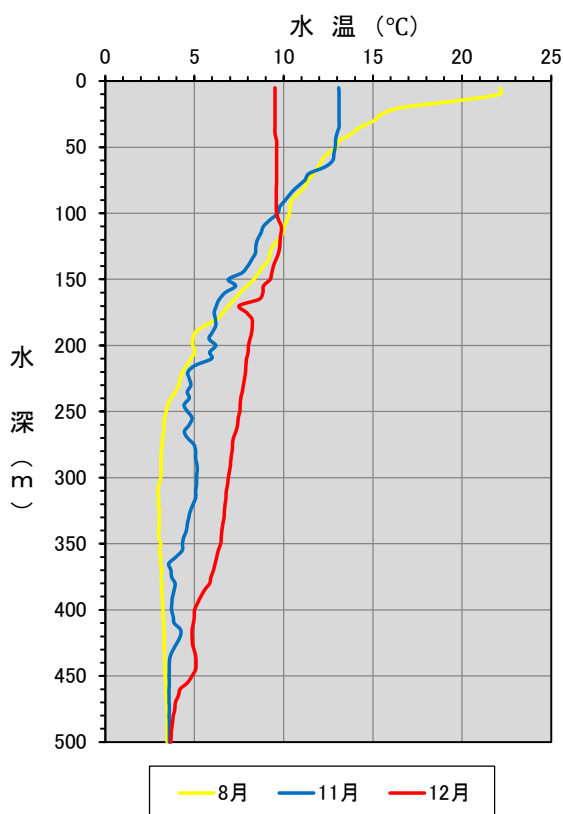


図6 調査時期別の水温の鉛直分布(H線沖)